
たれ日記

他楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たれ日記

【著者名】

NZマーク

N58020

【作者名】

他 楽

【あらすじ】

短編、詩、エッセイの詰め合わせです。

理解といつモノ

ある秋晴れの昼下がり。

「やあ、待たせてしまったね」

男は小走りのまま、待ち合わせ場所に佇む親友に声を掛けた。

「遅いじゃないか。一体何をしていたんだい」

「『じめん』『じめん』。ここに来る途中、あまりに見事な柊を見つけてしまってね。つい見惚れて、時間を忘れてしましたんだ」

「柊？」

親友は、なるほど、とうなずく。男が樹木をよなく愛している事を知っていたからだ。

もつとも、それは彼にも言えることだつたが。

「へえ、君が言つなら、さぞや綺麗だつたんだうね」

「ああ、それはもう見事に色づいていたよ。君にも見せたかったなあ」

「ははは。じゃあ、それは次の楽しみとしておひづ」

そう言つて、親友は男を促しながら歩き始め、

（柊が、さぞ美しい『蒼』に色づいているだろう……）

まだ見ぬ樹に思いを馳せた。

男が見た桜が、『紅く』色づいていたのも知らずに

理解といひモノ（後書き）

注) 桜は常緑樹です

祖父との記憶は曖昧だ。

何しろ、私が六歳で他界している。

同県内に住んでいたが、同居ではなく、祖母と二人、山の真ん中にあるような家で畑を耕しながら暮らしていた。姉と共に、母に連れられて遊びに行つても、終始寡黙で、私たちと祖母の話に耳を傾けるばかりだった。

ただ、ときたま私の頭をなでてくれた手は、節くれ立っていたがとても温かく、土の匂いがしたのが印象的だった。

そんな祖父が、ある時、私に昔語りをしてくれたことがある。それが亡くなる半年前だったことを思えば、もしかや遺言だったのだろうか、とも考えてしまうが、今となつては確かめようもない。

祖父は大正五年の生まれの人であるから、当然、戦争経験者である。

しかし、徵兵され、戦地へ行つてはいない。

生来左足が悪く、膝から下が麻痺していた。そのため兵役に不都合であるとされ、徵兵を免除されていたのだが、その事を生涯悔しがつた。

たいへん酒の好きな人で、この時も、私を膝に乗せながら、日中だというのに縁側で酒を飲んでいた。

その視線の先には一本の桜の木があつた。

「もうすぐ、この桜にも花が咲く」

何を言つてゐるのか分からず、私は祖父の顔を見上げたが、それには答えず、

「これはな、じいさんの友達が書いた手紙だ」

と、一枚の手紙をしめし、しわがれた声で読み上げた。

残念ながら私はその内容を記憶しておらず、また、同手紙は祖父の遺言により棺に収められてしまつたため、すでに消失してしまつている。

それ故、正確な内容はわからないが、存命中の祖母の話を元に再現すると、

『明朝の出撃が決まりました。

これが最後の御奉公で有り、御国に勝利をもたらすと、ただただ信じ任に就きます。

一つ氣懸かりなのは、郷里に残した〇〇の事です。

二人の子供をかかえ、これより先苦労多き事と想います。

貴方様の御高配を賜われれば、^{これ}之に勝る喜びはありません。何卒、何卒よろしく御願い申し上げます。

それでは、皆々様御身体に気をつけられます様祈り居ります』

といった内容であつたらしい。

この手紙を書かれた方は祖父の親友で、四月某日、太平洋上で散華された。

享年二八歳。

この方がどんな心境でこの手紙を書かれたのか。

この手紙を祖父はどんな気持ちで受け取つたのか。

残されたご家族がその後どうされたのか。

私の知り及ぶところではない。

しかし、この手紙を読んでいた時、祖父の顔に哀色はなかつた。ただ、澄み切つた瞳で、膨らみ始めた桜の芽を眺めていた。

それが、全てを語っていた様におもう。

夏の日

あれはそう、五年前の暑い日。彼女が泊まりに来た。

好きな女が泊まりたいと言つのだ、二つ返事で中に入れた。

夕食を取り、並んでソファーに腰掛けテレビを眺め、他愛無い話をする。よくある『恋人たちの休日』だが、今更特別な何かなど俺たちには必要ない。共に居る事が、すでに特別だった。

ふと、左手に熱さを感じた。

少し汗ばんだ彼女の右手が俺の左手に重なった熱さ。

それは、いつもの『合図』だつたが、俺は「訳が分からぬ」というような貌を作つて彼女の瞳を覗き込んだ。恥じらいからか、頬が幽かに色付くのを確認し、ささやかな優越感に浸る。

それでもあえて声をかけずにいると、彼女は少し視線を下げ、

「ねえいいで ッ」

そこまで聞いて、唇を塞いだ。

否があろう筈がない。

男が女を泊めて、する事は一つしかない。

宛がつた唇に熱さと湿り気を含んだ吐息を感じながら、ソファーに押し倒した。

彼女も抵抗するどころか催促するように首に腕を回し、唇を吸い上げてくる。

それが男の中に眠る『雄の本能』を呼び覚ますのだと、この男慣れしていな女でさえ知つてゐるのだから、つくづく女といつ生き物は恐ろしい。

痺れ始めた脳の片隅で笑うが、一度目覚めた本能が止まるはずも

なく、貪るように彼女を抱いた。

もう何も考えられない。

部屋の暑さも夏の所為なのか自分の所為なのかわからなかつた。
ただ、この甘い熱に溺れていきたい。

その思いが俺を急かし、さらに彼女を責め立てさせた
の時、背中に感じた幽かな風が俺を現実に引き戻した。

そ

(ヤバい、窓開けっぱなしだった)

ただでさえ安アパートのこと。

壁など段ボールより薄っぺらく、在つて無きが如し。笑い声どころか屁の音でさえ丸聞こえ。

おまけに窓の外は会話ができるほど近くに民家がある。
つまり…………そういう事だった。

(だが、今更やめられない)

一度走り出した車は止まらない。

一度滾ったケダモノも止まらない。
行き着くどこまで行くしかない。

後は出来るだけ声を殺し、誰にも気づかれないように祈るのみ
なのだが。

「あ～～～それ！それえ～～～ツ！～」

大音量の嬌声を上げられてしまった。
俺が心の中で頭を抱えた 次の瞬間。

「ソレ！ ソレ！ ソイヤサー！」

と、絶妙のタイミングで隣の部屋から会いの手が返ってきた。

俺たちは盛大に笑った後、急激に冷めてしまい、

「もう寝よつか」

「うそ、寝よつ

こそいそと服を着てベットに潜り込んだ。

次の日の事は、思に出したくない

後、

という事があつたんだよと奥様に話したら、盛大に笑われた

「で、相手だれ？」

……あの時の猛禽類のような眼を、私は一生忘れない。

前書き（前書き）

ハシ.....セイ?

ああ、成程。

気付いてしまえば簡単な事だ。

寧ろ、なぜ今まで気付かなかつたのか不思議な位だ。

最近の私には苛立ちがあつた。

言葉に出来ない座り心地の悪さ。

得体の知れない不快感。

そうした漠然とした苛立ちを感じていた。

それを反映するかのように、私の言動は攻撃色を濃くしていった。
強引な断定。

無差別の敵意。

ともすれば他者の否定。

翌日になれば、

「何故こうまで攻撃的な言葉を使う?..」

と、自分でも首を傾げるのだが、もつと不思議な事に、私はそれを良しとする自分にも気付いている。

敵対者を生む事の有利不利は十一分に承知している。状況と相手の実力によるが、概ね不利益の方が大きい。特に、これまで好意を抱いてくれていた相手を敵に回す場合の不利益は計り知れない。好意の全てが圧倒的悪意に変換されるのだから。

それでも尚「良し」とする理由はいつどこにあるのだろう。

私が長年構築し続けた論理と概念を検索してみても、それらしき

理由は見つからなかつた。

だが、これは私の無意識がもたらした『思いつき』ではない。

もうしそうであるなら、ここまで長続きしない。

とすると私が未だ言語化できていない 論理として構築されていなだけの、無意識による意図がある筈だ。

そう思つ位には、私は、私の無意識を信用している。

そして、この感想は正しかつたと今日確信した。

何の事はない。

分かつてしまえば単純な回答だ。

私は『敵』を欲しているのだ。

いや、少し語弊があるな。

私は、今の自分を否定する論理を欲しているのだ

私は今の自分にそれなりに満足している。
好いていると言つてもいいかも知れない。

同時に、『理想の自分』ではないという漠然とした確信もある。

「漠然とした」と前置いたのは、理想を明確に言語化できないからだが、「今より先がある」と根拠のない確信をしている。

今が理想でないと認識しているのだから当然自己改革をしなければならないのだが、それなりに満足してしまつた為に意欲に乏しく、どこを変えれば良いのか見当もつかないという状態が続いてもいた。要するに、煮詰まつていたのだ。

そうした状況を打破するべく、無意識に敵を作ろうとしていたのだろう。

敵とは、私に敵意又は悪意を持つ者であるから、私を打倒する為の論理を構築してくる筈だ。もしくは感情に元々反論でも良い。

とにかく、私の「粗探し」に血道をあげてくれる者が望ましい。

当然、私は持ちうる全ての論理を駆使して反論をする。

後はその繰り返しである。勝敗は問題ではない。

私の目的は、私自身の破綻を見つけ、それを解消する為の論理構築であるから、寧ろ負けた方が都合が良い。無論、手抜きはしない。こちらは全力で相対する。それは絶対条件であり、その上での『負け』を望む。

そもそも、『敵であるから闘わなければならぬ』とこゝのは固定観念に過ぎない。

敵である事と闘つ事は直結していないし、勝ちが最上の結果でもない。

目的に合わせて『敵』を規定し、『闘い』を手段とし、『結果』を欲求によって判定すれば良いのだ。

闘争とは本来そういうモノだが、この場合は直情徑行が強く理屈っぽい、つまり私に似た者ほど「最上の敵」と成り得るだろう。皮肉な話だが、それも私らしいか。

思い返せば、常にこの繰り返しであったな。

意識したのは今回が初めてだが、言動と結果から逆算するとそう判断するのが適切であろう。

刃物と砥ぎ石の関係に似ているか。擦る度に削れていいく砥ぎ石など役に立たない。刃物に勝る硬度を持つていてこそその砥ぎ石だ。そうであればこそ、刃物も鍛えられるというものだ。

しかし、そうと解ると、私は他者を『砥ぎ石』としか見ていないのだと結論できるな。

ふむ、これも私らしい。実に傲慢だ。

そして、私が好むのは砥ぎ石としての役目を果たせる者 私を屈服させ得る者たちという事もあるな。これも……まあ事実だな。親しい者は皆そうだし。

しかし、なんだな。
現状を表すなら、

試し斬り

をしているという事か。
斬りつけて見なければ硬いか柔らかいか判らないのだから、理にはかなつていてる……か？
いや、無差別に斬りかかるつているのだから、

辻斬り

と言つた方が正確か。
ううむ、それも一興ではあるが。

……いや、駄目だな。

事は私個人だけでは済まない。
私が嫌悪されるのは一向に構わないが、他に類が及ぶようでは問題がある。

ここでの私は軒先を借りている立場だ。
大家に迷惑はかけられまい。
大人しくするが道理だろう。

つまらんが、仕方がないか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5802o/>

たれ日記

2011年11月12日00時07分発行